

第7章

「ひげのヒーロー」

副読本 54-55ページ

年 組 番 名前

1

今日の学習で思ったことや考えたことを書きましょう。

道徳

ひげのヒーロー

「今日こそ電気ついたか。」
 毎日、おじいちゃんとお父さんが電話をよこす。
 3月11日、巨大地震発生。
 その時から、当たり前だと思っていた生活が消えた。電気も水も生活するすべてのものがなくなった。
 ほくのおじいちゃん、お父さんは、電気工事士。毎日、ほくがねた夜中に帰ってきて、朝4時には家を出る。
 「なんとか電気だけでも。」
 さおい中、復旧作業におわれていた。しかし、何日待っていても電気はつかなかった。
 「なんて、おじいちゃんもお父さんもがんばっているのに電気がつかないの。」
 と思ったりした。
 電気がない生活が、こんなにもひどいものだとは思わなかった。毎日、テレビを見て、夜は電気をつけると明るくなる。お風呂に入るのも、すべて電気が必要なのだ。その電気がない今、何もできない。
 (こんな日がいつまでつづくの。)
 と、かなしくて不安で泣いた。

ひさしふりに会ったお父さんの顔は、ひげだらけて、とてもつかれた顔をしていた。ほくは、クマみたいたとわらってしまったけれど、かっこいいと思った。いつになったら電気がつくのと、おこったり、ないたりした自分がはさかしくなった。

次の日、お父さんは、
 「お母さんの言うことをきちんと聞いて、たすけてあげてな。」
 と、ほくをだきしめて、しおがまに復旧作業に出かけて行った。
 今年のお正月もお父さんは、大雪で停電になっていた岩手県に行った。
 今も、被災地の復旧作業はつづいているが、電気の明かりは、きっと人々の心を明るくしてくれるだろう。

ほくにあって、お父さんはヒーローだ。
 電気の大切さを知ったほくは、大人になったら、お父さんのような電気工事士になろうと思う。

(作文宮城60号 特別編「あの日の子どもたち」より)

